

北村兼子と台湾

大 谷 渡

I

1930年（昭和5）1月に、台湾の主要都市で開催された婦人毎日新聞社主催の婦人文化講演会は、昭和初年のモダン文化とリベラルな雰囲気象徴する催しの一つであった。講演会の講師一行は、日本全国に知られた「女性文化の尖端を行く人々」として、「全島の民衆に期待」をもって迎えられた¹⁾。総督府と各州庁も、現代的文化の伝達者として彼女たちを歓待した。

講師一行の中でもっとも人気があったのが、北村兼子である。大阪朝日新聞社会部記者からフリーのライターに転じて国際的に活躍していた北村は、前年6月に万国婦人参政権ベルリン大会に日本代表として出席したあと欧州各国とアメリカを訪ねて秋に帰国していたのである。婦人文化講演会講師には、北村のほか生田花世・山田やす子・林芙美子・望月百合子・堀江かどえが加わっていた。

このときの婦人文化講演会と北村兼子については、拙著『北村兼子—炎のジャーナリスト』（東方出版刊、1999年）に「台湾、中国の旅」として記しており、その後に洪郁如『近代台湾女性史』（勁草書房刊、2001年）や竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史 昭和篇（上）』（田畑書店、2001年）に若干の記載があるものの、いずれもわずかであった。『関西大学文学論集』第54巻第4号（2005年3月）掲載の拙稿「北村兼子と林献堂」は、婦人文化講演会講師として台湾を訪ねた北村兼子と、林献堂ならびに彼をとりまく人びととの思想的交流について、台湾の民族運動との関連で考察したものである。この「北村兼子と林献

堂」をふまえ、本稿ではいま少し婦人文化講演会について検討を加えたうえで、北村兼子を糸口に大正・昭和初期の台湾の民族運動史および女性史の一側面を叙述しておきたいと思う。

1930年1月5日、基隆港に着いた婦人文化講演会講師一行は、台北駅で総督府秘書官や記者たちに出迎えられ、総督官邸の招待茶話会に出席したあと、午後6時半から鉄道ホテルで最初の講演を行った。北村は招待茶話会の様子を、「こゝで英気をつけて壇上に放たれる」「断髪のもの、ハイカラの娘、男のやうな女豪、左傾の女闘士など」「総督を中心にしてしゃべり立てる」「頗る天下の奇観」ととらえ、「私は一介の女浪人」だが「到るところで支配者からも無産者からも歓待を受ける」と、自己の思想と活動の幅に思いを向けた²⁾。

5日の講演会記事を載せた『台南新報』（8日付夕刊）は、「皮切りがツエ伯号飛行船を相手どつて名声を世界に馳せたジャーナリスト北村兼子さん³⁾」「婦人参政の主張の根拠」を示すと報じ、「次いで演壇に立つたのがプロレタリア運動の尖端を行く堀江かどえ女史」「風貌からしてプロ運動の闘士らしいところ」、「プロレタリア観に依る文化女性が将来の女性なる事」を語ると記した。そして、「若い女性北村、林、望月の諸女史が今を渦巻くマルキシズムやプロレタリアを排してのんびりした人生を楽しみたいと云ふのは異様にも聞ゆるが一面首肯出来ない事もない」と書いて、若い知識層の間における「マルキシズム」「プロレタリア」思想の流行現象にふれていた。

6日午後1時から台北共楽座で、4時から文教局の主催で総督府1階食堂において講演会が開催された。文教局主催の講演会は、「お役所帰りのお役人女事務員などが押しかけて立錫の余地なき盛況」となった。翌7日、婦人文化講演会講師一行は新竹公会堂で講演後、8日台中公会堂、9日台南公会堂、10日高雄澎湖会館、13日嘉義公会堂、15日台北医学専門学校講堂と、中南部諸都市で講演したのち再び台北で講演した。『台湾日日新報』と『台南新報』は、講師一行が帰途についた18日までの動静と各地での講演会の模様を連日報じた。この間、『台湾日日新報』の6日付夕刊と『台南新報』10日付夕刊は、北村兼子執筆の「女軍出征」と「台湾の第一印象」をそれぞれ彼女の写真入りで

掲載した。10日付夕刊は9日の発行であったから、『台南新報』は講師一行が台南に着いたその日に合わせて北村の文章を掲載したのであった。同紙には、8日の台中公会堂での講演記事も載っていて、「北村兼子、生田花世、山田やす子の三女史の熱弁最も傾聴に値する」と書いた。台南公会堂での講演の様子は、「旧都台南に新時代の風が吹く」の見出しで、翌10日の『台南新報』（11日付夕刊）に大きく報じられた。

台南公会堂での講演は、9日午後6時半から開催された。『台南新報』は、「定刻前より予想以上多数の聴衆続々と詰めかけ、開会前已に全市知識階級を内面的に充分アヂテイトして了つたかの感を懐かせる」と書いたあと、講師1人ひとりの特徴を記した。最初に登壇した望月百合子は、「政治上の都合からとあつて甚だ苦しそうな演説振り」で「抽象的な議論」であったが、「正義を実行に移すのは妾達の任務だと、はつきりした処をみせた」と記してアナキズム系婦人運動家としての望月の姿を描写した。

次いで登壇した北村兼子は、「望月女史の場合と異なつて時々挿まる野次に鮮やかな応酬を挟み」ながら、「明るいういットで聴衆の哄笑を絶ず捲起し乍ら巧みに話」を展開した。北村は、「婦人解放運動及び参政権問題の現在の位置並に将来に就て如何にもジヤアナリストらしい手捌きぶり」を示し、「『男性文明』の欠陥とそれが齎した不幸云々と迄十分鋭い処を見せて」引き下がった。堀江かどえは、「北村女史の如何にもリベラルな言ひ方とちよつと妙な対立」が感じられ、「文化婦人の二つのタイプ」「多分アメリカ型ソビエト型」にでもふれようとしながら、「取締の都合で」と「あつさり切上げて」しまった。

林美美子は「詩人的なやゝ感情的な迄の烈しさ」を感じさせた。生田花世は「純芸術家らしいプロフィールを床しく見せ乍ら本題に入る文字通りの熱弁」をみせ、山田やす子は「婦人の地位の決定」に関して「評判通りの雄弁」をふるった。

各地での婦人文化講演会では、聴衆の6割が男性、4割が女性といったところであった。聴衆は台湾人も台湾在住の日本人も、そうとう知識があり思想的関心の高い人たちであった。台湾語で野次が飛ぶこともあった⁴⁾。台南では、

数年前から北村の著書の愛読者だった台湾在住の日本人女性が講演を熱心に聞いていた。この女性が半年後に北村に宛てた手紙が現存している。その手紙を通して、婦人文化講演会の聴衆だった日本人女性の具体像と意識の一端をうかがうことができる。

手紙の日付は7月1日、台南市新町2ノ74の坂本住枝から大阪市中之島の北村兼子に宛てられ、消印は1930年7月3日である。坂本は、この年1月の台南での婦人文化講演会で北村の講演を聴いたあと、「手紙にて御礼を申し上げやうかと幾度も」思ったが、「余り何もかもに隔りのある事を思ひ」遠慮していたところ、「御新著拝見致しとうとうひかえてゐる事も出来ませぬやうな衝動にかられ拙い文をさし上げました」と書いている。「御新著」とは、北村の11冊目の著書で、この年4月に出版された『新台湾行進曲』（婦人毎日新聞台湾支局刊）のことである。

手紙には、「渡台後十五六年」とあり、「世の奥様方のやうな安易な寄生虫のやうな事は致して居りませぬ」、「つまらぬながら職業をもつてゐます」と書いたあと、それゆえ余計に「男性専制に苦しめられ」「自分の拙い宿世を顧み悲しみますけれども」「私のいひたいと思ひます事は何もかもすつかりあなた様が世に向つて仰つて下さいます」と述べたうえで、自己の望みにふれながら次のように記している。

世の為に尽くす事の出来ず身では御座いますなれば、何もかもすて、駆け巡りたいと存じますが、心ばかりはやりますもの、つまらぬ身はたゞ陰弁慶に終わります。伝統的の男性の圧制はなかなか私共の生きてゐる中にはよくはなりませんけれども、あなた様のやうな方が二代も三代もつゞく内には必ず女にもいゝ世の中になります事を信じます。

続いて彼女は、「女ばかりでは御座いません」「男も下層な者ほど苦しめられてゐます」と記し、権力的で不平等な政治を批判しつつも、「私もこんな事申しては」「失業の苦を見ねばなりませんから」「おとなしく気の毒な人達を視て居ります」と書いていた。

手紙からはこの女性の職業はわからないが、昭和5年8月1日現在の『台湾

総督府及所属官署職員録』の医院の項目に「台南婦人病院 台南市新町（130）」とあり、そこに「看護婦 坂本住枝」と記されている。彼女は台南病院の「看護婦」だったのである。同病院の職員は、「院長（兼）地方技師 野田兵三」「医員 清水清一」「嘱託 葉南輝」「事務員 村井尚」「看護婦 坂本住枝 益子 ミツ子」の6人であった。

坂本は北村宛の手紙の中で、男性も「下層な者」は、位の高い人の「一日の旅費にも足らぬ程の一ヶ月の収入にて吾子を多く扶養してゐます」と書いていた。このときの台南病院職員の給料月額は、医員135円、嘱託30円、事務員73円で、看護婦の坂本が53円、益子は33円であった。

台南婦人病院は新町1丁目にあり、坂本は同2丁目に住んでいた。1935年（昭和10）の「台南市街図」と1940年（昭和15）の「台南市区改正図」をみると、新町1, 2丁目は台南市街西端にあった運河の「台南船溜」のすぐ南東だったことがわかる。現在の台南市中西区康樂街である⁵⁾。

婦人文化講演会の会場となった台南公会堂の建物は、台南市民権路2段30号に現存していて、「原台南公会堂」と標示された史跡案内板に1911年（明治44）に落成し開館したと記されている。

婦人文化講演会講師一行は、1930年（昭和5）1月9日午後4時過ぎに台南駅に到着し、「官民及各夫人並びに操觚者等多数」に迎えられた。一行は「知事官邸における永山知事招待の晚餐会に臨み」、小宴のあと台南公会堂に入った⁶⁾。講師たちは、新竹でも台中でも高雄においても知事官邸に招待され、知事や夫人の歓待を受けた。

前掲の洪郁如『近代台湾女性史』には、1930年1月の婦人文化講演会について、「各弁士の演説中、しばしば席上の警察に注意されたり話途中で中断を余儀なくされていた」とあるが、台湾の主要都市で催されたこのときの婦人文化講演会で講演が中断されるようなことはなかった⁷⁾。

ところで、『台湾民報』1929年12月8日付第289号掲載の「台湾新進婦人への公開状（一）」は、開催が予定されていた婦人文化講演会に関する新聞報道にふれ、次のように記していた。

最近に於ける台湾島内の諸新聞報道に依れば、近々十一月末位か十二月頃に日本内地より所謂新進女流論客が来台の上全島各地に於て女子文化大講演会を開催し、以て実質的にも思想的にも我が台湾婦人界の為に大に氣勢を挙ぐる由と承る。

彼等はブルジョアの代言人か？それとも我がプロレタリア闘士の味方か？何れ来るべき現実が吾人に決定的報告をなすであらう。

だが絶対多数を擁せる二百余万の台湾プロレタリア戦闘婦人が、如何でか口を緘じ眼を封じて無言で居られやうか？鋭敏なる吾人の階級意識は、吾々に沈思黙想を許さないであらう。そして之を良きチャンスとして、台湾に於ける全思想的団体を始め文協も農組も民衆党も其他あらゆる我が台湾の男女闘士は奮て総動員を起し、未来の希望に輝ける台湾女性の為に万丈の気焰を挙げやうではないか？

上の文中に記されている「女子文化大講演会」は、婦人毎日新聞社主催の婦人文化講演会のことであり、実際には翌1930年1月に開催された。

『台湾民報』は、台湾人による台湾人のための言論機関として1923年（大正12）4月に東京で創刊され、1927年（昭和2）8月からは台湾での発行を許可されていた⁸⁾。同紙創刊の1年半前の1921年10月には、「台湾文化協会」が結成され民族運動の主翼となったが、急激に成長しつつあった無産階級運動の一派に占拠されて1927年1月に分裂した。同協会の旧幹部のほとんどは脱退し、同年7月に「台湾民衆党」が結成された。「台湾民衆党」の内部にも左右の対立があり、台湾人の民族的言論機関である『台湾民報』にも、左翼勢力の論調がしだいに目立つようになっていった。上記の「台湾新進婦人への公開状」は、「プロレタリア闘士」の立場から女性解放論を記述した連載記事の緒言にあたるものであった。こうした『台湾民報』の「左傾」論調について、北村は『新台湾行進曲』の中で「左傾思想にも段階があって、文化協会から民衆党をみると」、「共産思想の不足を感じるらしい」、「総督府も言論には相当の寛容を与えてあるやうで」、「あれ以上いひ切らうとするならばサヴェート・ロシアへでも移住せねばなるまいと思ふ」と記していた。

II

北村兼子は、1930年に2度台湾を訪ねた。1月の講演では、逢う人ごとに歓待された。「左傾も右傾も進歩も反動も」それぞれの思想をこえて、「ぜひ、も一度講演に来てくれ」と北村の「再遊」を希望した⁹⁾。4月に再度台湾を訪ねた時、彼女は台北と台中で講演した。

初めての台湾の旅では、台中霧峰の名家林家を訪ねて林献堂とその家族に親しく接したことが、彼女にはもっとも印象深いものとなった。台中は、台湾民族運動の中心地であった。台湾植民地議会の実現と民族的言論機関の育成に尽力した林献堂は、その学識と人格、経済力から民族運動の要に位置していた。

北村に林家訪問を勧めたのは、蔡阿信であった。彼女が夫の彭華英とともに案内したのである。北村より4歳年上の蔡阿信はこのとき満30歳、台中市橋町1丁目12番地に清信医院という産婦人科医院を開業していた。『台湾民報』1927年（昭和2）8月21日付第170号には、この医院の広告が掲載されていて、「清信産婦人科医院（電話三二〇番）」「婦人科 小児科 産科」「東京女医学士蔡阿信」と記されている。藤原正巳『台中・日本統治時代の記録』（台湾区域発展研究院台湾文化研究所、1996年）には、1928年（昭和3）の台中市街地図が縮刷で収められている。これをみると、台中駅の正面一帯が橋町だったことがわかる。台中駅を出ると左に2丁目、1丁目とあって、1丁目の区画のところに清信医院と記されている。現在の民権路（当時は大正橋通り）が、緑川をこえて鉄道の線路と交差する手前左側に蔡阿信の産婦人科医院があった。

『台湾民報』1924年（大正13）3月21日付第2巻第5号の「台湾通信」欄には、「女医学業」として「台北市日新町蔡阿信女士」とあり、「東京立教高女」に学び「東京女子医学専門学校」を卒業して台湾に帰り、「台北医院及赤十字社講究医術実擅長」をへて、「這回在自宅開業專治産婦人科」と書いたうえで次のように記している。

親切応患者，以仁術的心懷，施良好之手術，想地方的衛生狀態必籍是可進於佳美，堪預期的，他更有趣味婦人問題研究，以後新婦人的活躍努力，諒

可望進歩了。

上の記事から、蔡阿信は1924年初めに台北市の自宅に産婦人科医院を開業したことがわかる。『台湾人士鑑 台湾新民報日刊五周年記念出版』（台湾新民報社刊、1937年）の「蔡阿信」には、1926年（大正15）6月に台中市橋町1丁目の「現在地ニ於テ産婦人科医院ヲ開業」したと記されているから、1924年にまず台北市で開業し2年後に台中市に転居して清信医院を開業したのであろう。蔡阿信は産婦人科の医療を通して、台湾女性に貢献するとともに婦人問題の研究にも取り組んでいたのであった。

東京女子医学専門学校の同窓会誌『女医界』第110・111号（1916年4・5月号）には、1916年（大正5）度の入学者81人の氏名が掲載されていて、その中に「台湾 蔡阿信」と記されている。この年度の入学者は、日本人76人、中国人2人、朝鮮人2人、台湾人1人であった。4年後の1920年（大正9）の『日本女医会雑誌』第15号（1920年12月）には、「新入会員」として「文部省指定第一回卒業生」98人、「大正九年三月卒業生」16人、「大正九年十一月卒業生」11人、合計125人の氏名が掲載されていて、「文部省指定第一回卒業生」の中に「台湾 蔡阿信」と記されている。蔡阿信は文部省指定第1回卒業生として、1920年11月に東京女子医学専門学校を卒業したのであった。同校の1920年の卒業アルバムには、和服姿の蔡阿信の写真がみえる。東京女子医科大学史料室の資料によると、1947年（昭和22）までの東京女子医学専門学校の卒業生のうち、台湾人は119人であった。その最初の卒業生が、蔡阿信だったのである。1922年（大正11）12月発行の『日本女医会雑誌』第19号には、「日本女医会々員名簿」が掲載されている。その中には、「蔡阿信 台湾台北大稻程中街一番戸」と記されている¹⁰⁾。

東京女子医学専門学校を卒業し医師となった蔡阿信は、長い留学生生活を振り返りつつ今まさに故国に帰らんとするその胸のうちを綴り、「帰郷に際して」と題して『台湾青年』第2巻第1号（1921年1月）に寄稿している。彼女は「淋しかつた旅の長い生活も過去にならうとしてゐます、7年間の淋しい思ひも此の帰国の喜びに比較すれば何でもありません」と記した。日本への留学には、

周囲の反対があった。その「あらゆる反対の中」で故国を離れた蔡阿信は、「自分の総てを賭し努力勉勵して目的の道程を終へねばならない事」を自らに誓った。

留学中の7年間、彼女は「心から笑ひ楽しき日を過ごした事」はなかった。ただ「月に花に故郷を忍び」、「なつかしい肉親を思つては」淋しい心を慰めたのであった。それなのに、帰国の喜びを胸に抱く彼女に対し、「文明の潮の高鳴りしてゐる帝都」に長い歳月を過ごしたのだから、「国の事など忘れ又帰国するのも嬉しくはないでせう」と、無神経な感覚を表わす人達がいた。

蔡阿信は、「あの南国は私に取つての生命で御座いました」と言い、「帰国！帰国！本当に胸の振へる様な喜びと燃へる様な望みとが私の前に横はつて居ります」と書いた。国へ帰ったならば、「自分といふものを捨て、献身的に働かなければならない」「母の為に最初にベストを尽くさねばなりません」「そしてそれと同時に自分の思ふ様に国の為に働くといふ事はどんなに楽しい愉快的事で御座いませう」「自己といふものを捨て、周囲の為に尽くさねばならないと存じております」と、彼女は記したのであった。

帰国の目を目前にして、蔡阿信は台湾と台湾の人びとのために尽くしたいという思いを新たにしたのである。日本統治下の台湾から東京に留学し、長い淋しい生活を送る彼女の心を支えたのは、「母の為」「国の為」すなわち台湾のためという強い思いであった。この思いは、何人にも侵されるものではなかった。だれが何と言おうと「感情は致し方ない」と彼女は述べ、「こちらへあなたの御考へをお変へなさいといふのは無理な事」「人の感情に立入る程惨酷な、そうしてその人に対して苦しい立場と成る事はない」「感情こそ自己の全部を活用させて自己の為に生かして置きたい」とも記したのであった。

蔡阿信が東京女子医学専門学校を卒業した1920年（大正9）は、東京の台湾人留学生の間に民族的エネルギーが大きく燃え上がった年であった。この年春には「東京台湾青年会」が結成され、台湾統治の改革を目指して台湾人の幸福を実現しようとする運動が始まっていた。同年7月には、『台湾青年』が創刊された。台湾人の手による台湾の文化開発を目的とする、台湾人のための雑誌

が生まれたのである。編集兼発行人は蔡培火、発行所は東京市麹町区飯田町4ノ12台湾青年雑誌社であった。創刊号に祝辞を寄せた吉野作造は、「文化運動の潮流は」、「個人の意識に於ても、民族の意識に於ても、自主的なものとならねば本当のものではありません」、「文化運動の本当の成功を見るには、深き歴史と民族性とに根柢すべきものですから」、「その民族自身に任せねばなりません」、「日本内地に生ひ立つた文化を其儘台湾に植え付けんとするのは大なる誤りであります」と書いた。

蔡阿信は前掲「帰郷に際して」の中で、「今度台湾青年雑誌社が出来まして非常にうれしう存じます」と述べ、「雑誌のみならず更に一步進んで会館の様に成ることを望みます」と記していた。台湾青年雑誌社の庶務主任を務めていたのは、やがて彼女の夫となる彭華英であった。『台湾青年』の発刊に尽力した彭華英は蔡より4歳年上で、1921年（大正10）3月に明治大学政治経済科を卒業した。創刊後1年間台湾青年雑誌社で活躍した彭は、その後主として中国大陸で沿海漁業関係の事業活動に従事したのち台湾に帰り、1927年（昭和2）の「台湾民衆党」の結党に参加し同党の主幹となった。

「台湾文化協会」が左翼勢力に主導権を奪われ、同協会の旧幹部を中心に「台湾民衆党」が結成されたが、同党内部にも左右の対立が顕在化していた。彭華英は「台湾民衆党」の幹部となったが、党内左派の蔣渭水との路線対立から、1928年8月9日の常務会議で主幹を辞職することになった。『台湾総督府警察沿革誌第二篇 領台以後の治安状況（中巻）』（台湾総督府、1939年7月）は、「昭和三年末」の状況として、「蔣渭水一派の党に於ける勢力の増大に伴ひ、民衆党の労働運動、農民運動及青年知識階級の支持団体結成運動」が発展したと記している¹¹⁾。

『台湾民報』1928年11月25日付第236号に掲載された克良執筆の「民衆党前主幹彭華英氏の言論に就いて（四）」によると、主幹を辞したときの彭華英の考えは、「どうしても一般の知識階級や、地方に於ける信望を有する人々や、中産階級を党の結合中枢とし、その上に大衆を加味と為さざる限り、現在のやうな総督支配下に、党の政策実現を期することは甚だ困難である」というもので

あった。これに対して克良は、「民衆の多数を占めてゐる階級に基礎と背景を置くべく、組織し訓練して運動するのが当然」と批判し、「帝国主義下の敵締下に於ける現代的解放運動」は階級闘争であるべきだと主張していた。

1930年1月に北村兼子が彭華英と蔡阿信の案内で林猷堂家を訪ねたとき、北村は台湾民族運動の「左傾化」に目を向け、林家は「政治的識見において一頭地を挺いてゐる」けれども「誤られやすい立場にある」、「婦人運動にしても、台湾議会運動にしても、左傾分子が多く混入すればするだけ目的達成がおくれる」との感想を持った。林猷堂も彭華英・蔡阿信夫妻も、無産階級闘争とは離れて、台湾人の自治と幸福、自由と平等のために力を尽くそうとしていた。北村兼子は、「未来に生きる少年児童、その母体である婦人問題に興味をもつて文化講演会」の講師を引き受け、「資本主義にも共産主義にも」偏ることなく、人類の平等と平和を強く主張していた¹²⁾。それゆえに、彼らは互いに共鳴するところがあった。

ただし日本の官憲は、林猷堂・蔡培火・彭華英ら民族運動に早くから携わってきた人びと、日本の統治下にあつて台湾の幸福のために力を尽くしてきた人びとを特別要視察人として監視を続けていた。彭華英に対しては、1920年代前半には民族運動者であるとともに社会主義者であるとして官憲の目が注がれていた。

外務省外交史料館所蔵外務省記録の『自大正十一年一月 不逞団関係雑件 台湾人ノ部』には、1921年（大正10）11月16日付で「在上海総領事山崎馨一」から「外務大臣伯爵内田康哉」に宛てられた文書「太平洋会議ヲ機トシ台湾人独立運動計画ニ関スル件」が綴じられていて、次のように記されている¹³⁾。

蔡恵如ハ本年七月初旬膨(彭の誤記一大谷)華英ト前後シテ東京ヨリ朝鮮、天津ヲ経テ来滬ス

七月二十四日頃大東旅舎ニ於テ比律賓、印度及朝鮮人等ト共ニ会合シ太平洋会議ニ台湾代表ヲ派遣スルヤ否ヤノ議題ニ付キ討議シタルニ台湾ノ対日関係ハ朝鮮ノ対日関係ト其ノ趣ヲ異ニシ其ノ効果ノ如キモ疑問ナルハ単ニ請願書ニ留ムトノ議出テ結局代表派遣ハ決定セサリシト云フ

本年八月十八日、当時来滬中ノ日本社会主義者和田久太郎カー一品香ニ朝鮮人、台湾人ヲ招待シタルコトアリ其ノ時蔡及彭モ其ノ席ニ列ス、同人等ハ日本社会主義者大阪一派ノ「コスモ」倶楽部員ナルカ為ニ列席シタルモノニシテ該会合ハ何等政治上ノ意義ナシ

上の文によると、「太平洋會議」すなわちワシントン會議の開催に対応して、フィリピン・インド・朝鮮などの民族運動者の会合が上海で開かれ、そこに「日本社会主義者大阪一派ノ『コスモ』倶楽部員」で台湾人の蔡惠如と彭華英が出席したというのである。蔡惠如と彭華英は、「台湾ノ対日關係ハ朝鮮ノ対日關係ト其ノ趣ヲ異ニシ」との見解に立っていて、台湾の立場を主張していたことがわかる。

「コスモ倶楽部」についての論考には、松尾尊兌「コスモ倶楽部小史」(『京都橘女子大学研究紀要』第26号、2000年3月)がある。同論文によると、コスモ倶楽部は日本社会主義同盟結成過程で出現し、1920年から23年にかけて存在した思想団体であり、「日本の社会主義者と民本主義者、および朝鮮と中国の留学生ナショナリストの交流を主目的とする国際的組織」であった。論文中には、『大正十年一月調 思想団体ノ状況』(内務省警保局作成)の「コスモ倶楽部」の部分があげられていて、その中に同年1月8日「神田多賀羅亭ニ懇親会ヲ催シタルカ大杉栄以下要視察人四名支那人四名朝鮮人七名台湾人三名露国人二名其ノ他合シテ二十六名出席」と記されている。そして同論文には、社会主義同盟には朝鮮人や中国人は「わずかの例外を除き加盟が認められていなかった」とあり、「故山辺健太郎旧蔵の同盟名簿」には「北京の李大釗と、東京の『台湾青年』社の彭華英および朝鮮在住の鄭宇洪・姜仁秀」の氏名があり、「堺利彦から向坂逸郎へと継承されたもう一つの同盟名簿」には李大釗の名はあるが、彭華英の名はない」と記されている。同論文では大阪の「コスモ倶楽部」に関する記述はないが、1923年(大正12)1月の過激社会運動取締法案反対運動に関する一連の会合に出席した金鍾範は、「コスモ倶楽部」の代表を名乗る一方で「大阪朝鮮労働同盟会」の代表を名乗って出席していたとのことである。

1921年当時、彭華英が「社会主義同盟」や「コスモ倶楽部」にどのように関

わったのか具体的にはわからないが、それらの団体に関する史料に氏名が出てくるような位置に彼がいたことは確かであろう。

『自大正十一年一月 不逞団関係雑件 台湾人ノ部』には、前掲文書「太平洋會議ヲ機トシ台湾人独立運動計画ニ関スル件」のほか、「台湾政治運動者ノ来往ニ関スル件」（1921年12月24日付で在上海総領事船津辰一郎から外務大臣伯爵内田康哉に宛てられた文書）、「在上海一部台湾青年学生等ノ行動ニ関スル件」（1924年7月14日付で台湾総督府警務局長尾崎勇次郎から拓殖事務局長・外務省亜細亜局長・内務省警保局長・警視総監・朝鮮総督府警務局長に宛てられた文書）、「特別要視察人台湾人渡支ノ件」（1925年2月13日付で台湾総督府警務局長坂本森一の名で作成された文書）に彭華英の名がみえる。

「特別要視察人台湾人渡支ノ件」の通報先は、内務省警保局長・警視総監・外務省亜細亜局長・上海総領事・香港総領事・廈門領事・汕頭領事・蘇州領事であった。同文書には、「特別要視察人甲号 彭華英」とあり、「右ハ東京留学中高津正道堺利彦等ニ昵近シテ共產主義ヲ奉スルモノナルガ大正十年明治大学卒業後東京ヨリ渡支シ同年七月末朝鮮、印度、比律賓等ノ不平分子ガ上海大東旅舎ニ於テ開催シタル華盛頓會議ニ際シ試ムヘキ各植民地共同独立運動ノ協議会ニ蔡恵如ト共ニ台湾代表ト称シ参加スル等ノ要注意行動アリ」と記されたあと、「爾来上海又ハ北京ニ居住」して「中国沿海漁業協会設立」を企てたとし、1921年7月以降の視察要件に関わる内容は記載していない。1925年（大正14）2月の「特別要視察人台湾人渡支ノ件」は、彭華英・蔡阿信夫妻が台中州から上海・蘇州・廈門・汕頭・香港行きの旅券交付を受けて同月11日に基隆出港の福建丸で旅行に出たことで作成されたものであった。同文書は、妻の蔡阿信にふれて「東京女子医学専門学校出身ニテ同校在学中ヨリ彭華英ト懇意ナリシモノニシテ」などと書き、1924年11月に事業に失敗して台湾に帰った彭華英が「台北市日新町二ノ一〇女医蔡氏阿信ト結婚」したと記している。

彭華英は、明治大学を卒業して2か月後の1921年（大正10）5月の『台湾青年』第2巻第4号に「社会主義之概説（上）」と題する文を掲載し、「社会主義なる四字は実に今日世界に在りて新しき時代の名詞となつた」「人は如何なる

新主義、如何なる新主張を論ぜず、宜しく研究的態度と批評的眼光を以てそれ
に対せねばならぬ」と記したうえで、「社会主義の発達及び其精神」「国家社会
主義」「共産主義」について紹介していた。東京の台湾人留学生の間に燃え上
がった台湾文化運動の中心にいた彭華英は、思想研究にも力を注ぎ、1920年か
ら21年の時期に「社会主義同盟」や「コスモ倶楽部」に関わり、上海において
アジア各地の民族運動者とも接触した¹⁴⁾。そのために、日本官憲から「社会主
義者」「共産主義者」とみなされたが、1924年（大正13）11月に台湾に帰って
以降における彭華英の政治活動は、階級闘争理論に立つ左翼青年運動家から、
無産大衆に立脚しない人物として批判されるような状況にあった。

北村兼子は、1930年（昭和5）3月に執筆した「台湾民族運動史」の中で、
1924年（大正13）を台湾における民族運動の転換点との見解を示していた¹⁵⁾。
この時期から、農民運動・労働運動が激化し、「左傾運動」によって民族運動
は複雑な様相を呈するようになったというのである。「台湾文化協会」の左右
分裂と「台湾民衆党」の結党、さらに「台湾民衆党」内部における左右対立の
顕在化は、その流れの中で起きていた。

『台湾民報』の1930年7月以降に「台湾社会運動十年史概要」を連載した謝
春木は、「左傾化」する民族運動の激流を表現して、「今右派に立つ林猷堂、蔡
培火両氏」もかつては「極左派であつたことは注目に値する」、現在の「彼等
が退歩したといふのではなく、社会進化の風浪が余りにも急激にして」、彼ら
は「渚に打ち上げられた」のであると記した。「無産青年一派」は、「林猷堂一
派を裏切り者」と非難した¹⁶⁾。だが、林猷堂や蔡培火たちは、日本官憲から「特
別要視察人甲号」として監視を受けつつも、台湾人の幸福、自由と平等を求め
て一貫した取り組みを続けていたのである¹⁷⁾。

霧峰林家を訪ねた北村兼子は、「抑圧に苦しむ者の声」「人類愛の勝利に徹底
的信頼を置く者の歓声」を聴こうとする林猷堂の人格に接し、その心の奥深く
に響きあうものを確かめることができた¹⁸⁾。そして、彼女を霧峰に案内した蔡
阿信と彭華英の二人も、林猷堂らとともに台湾のために力を尽くしていたので
あった。

Ⅲ

『台湾民報』1925年（大正14）8月26日付第67号は、「創立五周年記念号」として発行された。1920年（大正9）7月の『台湾青年』創刊から数えて、五周年を祝したものであった。この記念号には、『台湾青年』創刊号の写真と、それを取り巻くかたちで、発刊に直接関係した人びとの肖像が掲載されている。上部右に林猷堂、その左に蔡恵如、続いて左回りに、彭華英・徐慶章・蔡培火・林呈祿・林中澍・王敏川らがぐるりと創刊号を囲んでいる。

『台湾青年』は1922年（大正11）4月から『台湾』と改題され、翌23年4月に『台湾民報』が創刊された¹⁹⁾。『台湾』は『台湾民報』創刊後しばらく発行されたが、1924年（大正13）5月で廃刊となった。したがって、文化運動・民族運動の台湾人による台湾人のための言論機関は、『台湾青年』に始まり『台湾』から『台湾民報』へと継承されたのである。

『台湾青年』創刊号の「巻頭之辞」は、「世界大戦乱」という「絶対の大不幸によつて、生き残つた全人類」は、「利己的、排他的、独尊的の野獣生活を排して共存的、犠牲的、互讓的の文化運動を企てるやうに醒めてきた」と記した。「国際連盟の成立」「民族自決の尊重」「男女同権の実現」「労資協調の運動」、どれ一つをとっても「大覚醒の賜でないのではない」と言い、「これに共鳴し得ない人は、人として価値が零であろう」「台湾の青年！」「吾人は尚立たないで居られやうか」と書いた。新しい文化の潮流に取り残されている台湾のために、「広く内外の言論に耳を傾け」「取るべきものを最大となく取り入れて我が養ひ」とし、文化啓発の発信機関となるというのであった。

翌月の同誌第1巻第2号には、林呈祿の「地方自治を述べて台湾自治に及ぶ」、蔡式穀「台湾の地方行政制度の改革に就きて所感」、蔡培火「吾人の同化感」などととともに、彭華英の「台湾に婦人問題があるか」が掲載されている。ここで彭華英は、「労働問題」「人種問題」「婦人問題」の徹底的解決をみなければ「人類生活の理想的建設は遂に一夜の空夢に化する」と述べ、「婦人問題」は「労働問題と同様に現時最も緊要な問題の一つ」であり、それは「婦人の人格能力

を認めて婦人を開放する問題、婦人の権利を伸張する問題に外ならぬ」と記している。彭華英の「台湾に婦人問題があるか」は、『台湾青年』『台湾』『台湾民報』という台湾民族運動の言論機関に掲載された多くの女性解放に関する評論のなかで最初のものであった。

彭華英は同評論の中で、世界大戦中の国家社会への貢献と戦後経営上の力が欧州の女性の力を伸張させ、イギリスでは女性参政権が実現したと記し、日本でも欧米の自由思想の影響を受けて「新婦人協会」の「花柳病男子の結婚制限案」「治安警察法第五条改正」の請願運動にみられるように、「自己の開放と参政の運動」が進展していると書いた。そのうえで、台湾の現実に目を向け、「生活状態の大半は殆んど逆世的、退嬰的、陋習的の境界を脱せず」と述べ、「圧制的なる結婚の陋習」「貨幣を以て売買する極悪な結婚方法」「蓄妾貯婢なる非道的慣行」を批判した。そして、「女子閉鎖の開放」「自然的なる人間らしき修養」を実現させてこそ、「改造途上にある吾々の任務」を共に分担して「民族発展の為め、人類社会進化の為め」に尽くすことができると主張した。それは、「人格の独立」「自由意思を尊重する精神」と深く結びついていた。こうして民族的言論機関に登場した女性解放論は、台湾の「民族発展の為め」の運動と不可分一体で展開されたのであった。

『台湾青年』第1巻第3号（1920年9月）は、王敏川の「女子教育論」を漢文ページに掲載し、第1巻第4号（1920年10月）は陳崑樹の「婦人問題の批判と陋習打破の叫び」と、林双随の「私の台湾婦女観」を掲載している。陳崑樹は「蓄妾制の漸禁策」「査某嫖制廃止の徹底」「売買婚姻の厳禁」を訴えた。林双随は「台湾一般の女子は、全然眠つてゐるといふても過言ではない」「横暴な男子に侮辱されても黙守する」「一家に第一、第二、第三、といふ様に多くの妻が互いに権力を張らんとして、暗闘を続ける」と記したあと、「最も大切な女子教育を粗略にするといふ事は、即ち台湾将来の向上発展を障げる」「婦人の開放は台湾一般の女子が教育を受け、能力を高めた後でなければ解決されぬ問題だと思ふ」と、女性の立場から訴えていた²⁰⁾。

その後の『台湾青年』は、「結婚の改善を絶叫す」（第1巻第5号）「婦人教

育の理想」(第2巻第1号)「婦人問題の根本主義を論じ且つ台湾婦人界の悪現状を排す」(第2巻第4号)といった文章を掲載し、1922年(大正11)4月以降『台湾』と改題して「男女共学与結婚問題」(同年9月号)「醜業婦縛束解放論」(翌23年2月号)を漢文ページに載せた。1923年(大正12)4月からは同誌の「漢文部を独立」させ充実するかたちで『台湾民報』が創刊され、民族運動、文化運動の言論機関としての中心的役割はこちらに移った²¹⁾。台湾の「民族発展の爲め」の運動と一体であった女性解放論も『台湾民報』で展開され、その内容は運動の進展や社会の動きと密接に関わりながら変化した。

1923年4月15日付で創刊された『台湾民報』は、「創刊詞」を掲げ、日本の統治下で産業・経済・社会の開発は進行したものの、台湾同胞の経済は圧迫され負担は増え、社会・文化面で取り残されていると指摘した。そのうえで、「最親愛的三百六十万父老兄姉！我們処在今日的台湾社会，欲望平等，要求生存」と記し、平易な漢文を用いて民衆的知識を満載した新聞を創刊して「我島文化」を啓発し同胞の元気を振起し、「台湾的幸福」を実現すると宣言した。この方針に沿って、女性解放関連記事が数多く掲載された。

1923年(大正12)中には、「婦人参政運動」(4月15日付第1号)、「提倡家庭的改造」「結婚問題発端」「中国婦人的解放論」(いずれも5月1日付第2号)、「徹底的婦人解放論」「女子職業問題」(5月15日付第3号)、「廢娼的私見」(7月15日付第4号)、「女子在社会上应处的地位」「女子在社会上的注意」「意国衆議院提出女子行政選挙」(10月15日付第8号)、「婦人問題(一)」(11月11日付第10号)、「婦人問題(続)」(11月21日付第11号)といった記事が掲載された。

1924年(大正13)には、「婚姻制度的進化概観」(2月21日付第2巻第3号)、「家族制度的将来」(4月21日付第2巻第7号)、「婦人の自覚」(6月21日付第2巻第11号)等々の記事がみられ、9月からの「婦人問題」欄には、「我的婦女観」(9月11日付第2巻第17号)、「現代女性観」(10月1日付第2巻第19号)が掲載されていて、女性の自由・平等確立のうえで経済的独立の大切さが強調された。

1925年(大正14)になると、3月1日付第3巻第7号に「彰化設婦女共励会」

の記事を掲載し、台湾中部彰化の知識階級の女性たちが学問研究と社会貢献を掲げて「婦女共励会」という女性団体を組織したと報じた。会員の多くは新教育を受けた女性であった。2月8日午後1時から体仁分院で発会式が挙げられ、楊咏絮が開会の辞を述べ、蔡鳳が会員を紹介し、潘貞が創立経過を報告したとあり、「王琴女士審議会則、阮素院女士演説、其他来賓演説、並選挙職員、至六時散会」と記されている。8月30日付第68号には「彰化婦女講習会」、9月20日付第71号に「婦女共励会之活動」などが掲載されたが、1926年（大正15）3月14日付第96号には「考察彰化的恋愛問題」、3月21日付第97号に「彰化婦女共励会奮起 此後著実進行 決議排斥邪女」の記事を掲載した。会員の恋愛問題で、「婦女共励会」が社会的打撃を受けたのである。

「彰化婦女共励会奮起」の記事が掲載されて4か月余りのち、1926年8月1日付第116号は、「婦女問題大講演会 新竹公会堂」の記事を載せ、7月18日に劉英と廖秋桂という2人の女性社会運動家が文化協会新竹支部の要請を受けて講演したと報じている。この日、劉・廖の2人は、連温卿・王敏川・郭茂巳と共に新竹駅に着き、「歓迎茶点会」に臨んだあと、同日夜に劉英が「男女平等論」、廖秋桂は「日台婦女地位的差別」について講演した。この2人の女性は、7月24日に通霄で25日には大甲でも講演していて、その模様を報じた8月8日付第117号の「通霄大甲的婦女講演」の記事には、「近来各处皆欲組織婦女会」と記されている。さらに、8月15日付第118号には「諸羅婦女協進会出现了」の記事が掲載されていて、嘉義街碧成堂の女性店主許碧珊が30人余の同志とともに「台湾諸羅婦女協進会」を組織し、7月22日の発会式には会員女性による講演があり、林猷堂の祝電のほか各地から祝電が届いたと報じている。「諸羅婦女協進会」に関する記事は、10月10日付第129号と12月5日付第134号にもみられ、12月5日の「嘉義婦女問題講演会」には、「諸羅婦女協進会以促進婦女運動的成功」と記されている。

『台湾民報』における1925年から26年にかけての女性の団体や講演会の報道は、文化運動を推進する指導層の動向と深く結びついていた。『台湾民報』1926年8月8日付第117号は、社説「台湾婦女解放運動的先声」を掲げ、「婦女

同胞們！解放獨立須要你們自己努力去要求！須要你們快々起來組織全島婦女大會，開始你們的工作！」と呼びかけていた。8月15日付第118号の「論評」欄には、「婦女們有團結的必要」を掲載し、台湾の幸福のためには民衆政治の実現が必要であり、そのための近道は労働者の解放と女性の解放にあると述べ、「婦女們快々奮起團結吧！」と訴えていた。

「台湾文化協会」が無産青年に主導権を奪われ分裂したのは、1927年（昭和2）1月であった。この年初め『台湾民報』1月2日付第138号は、「過去一年間的台湾思想界」と題する論説を掲げ、資本階級と労働階級の対立軋轢をあげ、「資本制度的傾向」の「自由主義的一派」と、「労働階級的論潮」の「民主主義的一派」の思想対立について記した。1月30日付第142号の評論「台湾解放運動的考察」では、無産者の進出と無産青年会にふれたうえで、「台北無産青年女子部」を台湾における女子解放の先駆的組織と位置づけた。1月30日付第142号から2月13日付第144号まで3回連載の「轉換期的文化運動」には、資本主義と社会主義の論戦が激烈となり、「台湾文化協会」は分裂に至ったと記され、2月20日付第145号「論壇」欄の「婦女運動的認識」には、「無産階級的婦女運動」に基づく「革命精神」を備えた「婦女解放運動」が提唱された。

この年4月24日付『台湾民報』第154号には、評論「台湾的農民運動」や、布施辰治の「無産者解放的講演」（翻訳）が掲載され、5月には「以農工階級為基礎的民族運動」（5月1日付第155号）、「階級闘争与民族運動」（5月15日付第157号）といった文が掲載された。こうした『台湾民報』の論調の背景には、大正末から昭和初期にかけての台湾の農民運動と労働運動の展開があり、日本国内における無産運動の高揚があった。この時期、日本は政党内閣の確立期に入り、男子普通選挙制が実現し、社会運動は活発化して、戦前日本ではもっともリベラルな時代を迎えていた。日本国内の風潮は、台湾の民族運動に刺激をあたえるとともに、比較的自由な活動を可能にした。

1927年（昭和2）8月、『台湾民報』は念願であった台湾での発行を許可された。同紙8月1日付第167号は、社説に「民報的転機 台湾統治方針更新的暗示」と題する文を掲げた。前月7月10日には、台中で「台湾民衆党」の結党

式が挙行されていた。1928年（昭和3）5月6日付第207号は、「サーベル政治から文教中心政治の転換」と題する文を掲載し、「総督府の方針が従来の警務局偏重主義から文教局中心主義と転換しやうとすることは誠に時代思潮」に適ったことと記した。

ところで、『台湾民報』は、1928年7月から9月にかけて「台湾婦女問題」欄を設け、「政治上的解放」「社会上的解放」「知識上的解放」についての投稿を募った。同欄には、「台湾婦女同胞們的政治經濟社会的地位」（7月22日付第218号）、「我們台灣的婦女解放問題」（7月29日付第219号）、「婦女解放運動与民族解放運動」（8月5日付第220号）、「台湾婦女運動方法的一考察」（8月12日付第221号）、「要解放台灣的婦女 須打破現在結婚制度」（8月19日付第222号）、「台灣的婦女運動從那裏作起」（8月26日付第223号）、「婦女解放須由實際做起」（9月2日付第224号）といった文が掲載された。このうち、「婦女解放運動与民族解放運動」と「台灣的婦女運動從那裏作起」の二つの文は、同じ「紅農」の名で投稿されていて、台湾の無産大衆が世界の弱小民族と戦線を一つにして民族解放を完成することと、台湾の婦女解放運動はともに帝国主義侵略からの解放であり革命であると主張していた。

1929年（昭和4）12月1日の『台湾民報』に、張月澄の「台湾新進婦人の公開状（一）」が掲載され、日本の「新進女流論客」による婦人文化講演会についての新聞報道にふれたうえで、「彼等はブルジョアの代言人か？それともプロレタリア闘士の味方？」と書いていたことはすでに記した。『台湾民報』12月8日付第290号掲載の「台湾新進婦人の公開状（二）」は、「ブルジョア婦人解放運動の特質」として、「所謂『法律の水平線化』を求むるに過ぎない」「単なる政治的デモクラシイの要求をなす一派」「改良的社会民主々義の戦線をなすフェミニズムの一派」「我闘争的プロレタリア婦人戦線を攪乱しつゝある奴輩」と記している。そして、12月15日付第291号の「台湾新進婦人の公開状（三）」は「中層『灰色』婦人運動の特質」を述べ、「資本家階級の総動員手先に利用される反動的危険性を十分に具備してゐる」「乍然、一面に於て我プロレタリア戦闘同志の奮闘的活動や努力の如何に依て彼等を我陣営内に引入れ得るであ

らう」と書いていた²²⁾。

大正末から昭和初期に、「台湾の幸福」、自由と平等を求める運動は、日本国内の政治面や社会面におけるリベラルな風潮と呼応するかたちで大きな盛り上がりを見せたが、同時期に彼らの運動は、先鋭な「左傾」民族運動の激しい波に洗われていたのである。その「左傾」運動論、すなわち階級闘争革命理論に立脚して唱えられたのが、先にあげた「婦女解放運動与民族解放運動」や「台湾新進婦人の公開状」であった。

1930年（昭和5）1月に婦人文化講演会講師として台湾各地を回った北村兼子は、このような台湾の「左傾」民族運動に対し懸念を示していて、霧峰林家の名庭園「萊園」²³⁾を訪ねたときの印象の中で次のように記した²⁴⁾。

台湾が乱れて萊園の存在はない。私たちの理想とする婦人平和主義が国際的に行はれて、始めて庭園を楽しみ人生を楽しむことができるのである。周囲の群小が林氏を誤解せしめ、先生の徳を煩はすことの多いのを遺憾に思ふ。林先生の真意がどこにあるかは内地で文化運動をやつてゐる私には靈犀一点相通ずるところがある。私には不可解のものではないが、彼等鷄鳴狗盜の徒が萊園をもつて梁山泊とし、左傾運動の兵站を林家に仰がんとするのは腹が黒い。大林猷堂先生は宋公明となるなかれ、なつてはならない。南陽の臥龍をもつて任ずべき人ではなからうか。あせつて熟しない木瓜をむしるよりも退いて風雲をまつがよからうと思ふ。

北村兼子は、「資本主義にも共産主義にも」偏らず、自由人の立場、すなわち彼女の言う「女浪人主義」に立脚して、人類の平等と、世界の平和確立を主張していた²⁵⁾。日本による台湾植民地支配についても、彼女は統治の実態を直視し、世界のわく組みのなかで問題点をとらえ、自由と平等そして幸福を求める台湾の人びとの主張と運動に共感を示した。だから彼女は、1930年1月の婦人文化講演会の旅を終えて台湾を去るとき、左右中道の別なく台湾の人びとから、再度の来訪を請われたのである²⁶⁾。

『台湾民報』1930年3月22日付第305号は、「お待ち兼ねの『新台湾行進曲』出づ」「林猷堂序文」「装丁 藤田嗣治画伯」「才筆昭和の紫式部を以て自他共

に許す、而も世界人たる著者の先鋭なる筆端が如何に新興台湾を組上にのせるか」と記して、北村兼子の新著の広告を掲載した。その翌月、彼女は再度台湾を訪れ、台北と台中で講演した。「女浪人主義」と「国際婦人平和主義」に基づき「戦争の罪悪」と「男性の暴力主義」そして「軍備の絶対不要」を訴えた彼女の講演は、数度の注意を受けたのち中止を命じられた²⁷⁾。

林献堂は、この講演の翌日4月20日の日記に、「昨夜兼子之講演被注意数次、後中止」と記したのであった²⁸⁾。

注

- 1) 「昭和女性新女性」の叫び 婦人文化大講演会『台湾日日新報』1930年1月5日付朝刊。「婦人講演会一行歓迎茶話会」『台南新報』1930年1月6日付朝刊。
『台南新報』は「明治三十二年七月四日第三種郵便物許可」、発行所は台南市本町3丁目234番地 株式会社台南新報社である。
- 2) 北村兼子『新台湾行進曲』（婦人毎日新聞台湾支局刊、1930年）。
- 3) 1929年（昭和4）年6月に、万国婦人参政権ベルリン大会に出席した北村兼子は、ヨーロッパから帰国するにあたり、世界一周の途次にあった飛行船ツェッペリン伯号に乗船して、ドイツのフリードリヒス・ハーフェンから霞ヶ浦に向かおうとした。アメリカン・ハンブルク汽船会社に料金の支払いも済ませていたが、報道権の侵害を主張する朝日・毎日両新聞社の記者の妨害があって、彼女の乗船は実現しなかった。
- 4) 『台南新報』1930年1月10日付夕刊。前掲『新台湾行進曲』。
- 5) 台南市立図書館所蔵の1935年の「台南市街図」および1940年の「台南市区改正図」と、現在の台南市街の地図を照合すると、新町が中西区康樂街であることがわかる。
- 6) 「台南と高雄の文化講演講師一行」『台南新報』1930年1月10日付朝刊。
- 7) 洪郁如『近代台湾女性史』は、「中断を余儀なくされていた」に注をつけ、「女浪人講演傍聴記」『台湾新民報』1930年4月26日と記している。『台湾新民報』1930年4月29日付第310号（29日は26日の誤植と思われる）に掲載された「女浪人講演傍聴記」は、同年4月19日の台中における北村兼子の講演を報じた記事であり、「女浪人」とは北村兼子のことを指している。北村は、1930年1月の婦人文化講演会を終えて1月18日に日本に帰り、3か月後の4月13日に再び台湾を訪ねた。4月には、16日に台北で19日に台中で講演した。洪郁如『近代台湾女性史』は、北村が2度台湾を訪ねたことを知らず、彼女の動静や講演の意味を把握できていないために、4月の台中における北村の講演と、1月の婦人毎日新聞社主催の婦人文化講演会とを混同してしまったようである。4月19日の台中での北村の講演については、拙稿「北村兼子と林献堂」（『関西大学文学論集』第54巻第4号、2005年3月）に詳しく記した。

北村兼子と台湾（大谷）

8) 『台湾民報』1927年8月1日付第167号は、「本報島内発刊と言論の自由」と題する「論評」を掲げ、「台湾当局が時勢の進運に推されて、当然の事とは言へ久しく行悩んでゐた本報島内発刊といふ問題を解決してくれたことを多とし、併せて今日の統治上に或る程度まで現在の当局に誠意あるものと見做さねばならぬ」と記している。同紙は同じページに「和文民報の発刊に際して」と題する文を掲載していて、台湾島内での発行にあたり新たに和文ページを設けた趣旨について述べている。

前掲の洪郁如『近代台湾女性史』は、1923年（大正12）10月に『台湾』の和文部分は『台湾民報』に移されることになり、『台湾民報』の三分の一は和文記事が占めるようになった。その後、『台湾民報』の急速な発展にともない、1924年6月には『台湾』が廃刊されることになった。」と記しているが、『台湾民報』1923年10月15日付第8号から同年12月11日付第13号までの間の和文掲載は、雑誌『台湾』休刊に伴う一時的なものであった。『台湾民報』が新たに和文ページを設けて和文記事を掲載することにしたのは、1927年8月1日付第167号からである。

9) 前掲『新台湾行進曲』。

10) 『女医界』『日本女医会雑誌』および東京女子医学専門学校の1920年の卒業アルバムは、いずれも東京女子医科大学史料室で閲覧した。

11) 『台湾史叢書2 日本統治下の民族運動（下巻）政治運動編』（台湾史料保存会刊、1969年）。

12) 前掲『新台湾行進曲』。前掲「北村兼子と林猷堂」。

13) 同文書の冒頭部分には、「本籍台中市大甲郡清水街清水四十三番地 当時支那上海南成都一九六号成都劉寓内 蔡惠如 当四十三年」とあり、「右者本年七月以来東京ヨリ当地ニ渡来シ太平洋会議ヲ機トシ台湾独立運動ヲナサムトスルヤノ風評アリ視察ヲ遂クルニ左ノ通ニシテ別段ノコトナキモ此段及申報候」と記されている。

14) 外務省記録『自大正十四年 要視察本邦人挙動関係雑纂』に綴られている関東庁警務局長名の文書「要注意台湾人ノ言動」は、大連在住の台湾人医師郭進水と徐栄の「言動」について1925年4月13日付で作成されていて、郭進水の言として、彭華英は「明大在学中ヨリ思想ノ研究」に熱中するところがあり、「危険思想抱持者」のようにみなされたが、「台湾人ニ於テハ真ニ此等危険思想ヲ抱擁スルカ如キ者ナシト云フヘシト語り居レリ」と記している。

15) 「台湾民族運動史」は、北村兼子の遺著『大空に飛ぶ』（改善社刊、1931年10月）に収められている。

16) 「台湾社会運動十年史概要（一）」『台湾新民報』1930年7月16日付第322号。前掲『新台湾行進曲』。

17) 1926年（大正15）8月2日付で在上海総領事矢田七太郎から、外務大臣幣原喜重郎に宛てられた文書「特要視察人ノ行動ニ関スル件」は、「台湾文化協会専務理事蔡培火」と「林猷堂ノ息林猶龍、雲龍」の3人の上海渡航に関する視察状況について記している（『自大正十一年一月 不逞団関係雑件 台湾人ノ部』）。1929年（昭和4）4月15日付で福岡県知

事齋藤守圀から、内務大臣望月圭介・外務大臣田中義一・指定庁府県長官に宛てられた文書「要視察台湾人帰台ニ関スル件」は、「特要甲号林猷堂」「特要乙号羅萬俔」「特要甲号林呈録」と記し、台湾議会設置運動のために上京した3人が帰途門司を通過し基隆に向かったことを報告している。1929年（昭和4）12月7日付で福岡県知事松本学から、内務大臣安達謙蔵・外務大臣幣原喜重郎・台湾総督府警務局長・指定庁府県長官・台北台中各州知事に宛てられた文書「要視察台湾人来往ニ関スル件」は、羅萬俔についての視察報告であり、「前段容疑ノ点ナク」としたうえで羅萬俔の言として、「本船ニハ友人蔡培火モ乗船シ居ルガ彼ハ各地ニ於テ尾行ヲ付セラレ居リ真ニ同情ニ不堪ヘ又警察官憲ニ於テモ吾々ノ真情ガ理解サレズ真ノ国家主義者ヲ徒ニ左傾視セラル、ハ実ニ遺憾ニシテ之ガ為メ省ツテ叛逆心ヲ興サシムルハ必然ノコト、思フ」と記している。

18) 前掲『新台湾行進曲』。

19) 『台湾』第3年第1号（1922年4月）は、「台湾の新使命」と題する文を巻頭に掲げ、「時勢の推移と我島の要求とに於て、茲に『台湾』と改題するの機運に到達した」と記している。

20) 前掲『近代台湾女性史』には、林双随は霧峰林家の林仲衡の長女、富士見小学校に入学、1919年（大正8）に青山女学院高等女学部卒業と記されている。

21) 『台湾』第4年4号（1923年4月）、『台湾』第4年5号（1923年5月）。

22) 『台湾民報』1929年12月22日付第292号の「台湾新進婦人への公開状（四）」の掲載欄は、挿絵を除いて伏字または空欄となり、全文不掲載となっている。

23) 北村兼子が訪ねた林家の「菜園」は、1999年9月21日の台湾中部の大地震で大きな被害を受けたが、その後修復されて明台高級中学の広い敷地内で鑑賞することができる。

24) 前掲『新台湾行進曲』。

25) 「女浪人講演傍聴記」『台湾新民報』1930年4月29日付第310号（29日は26日の誤植と思われる）。北村兼子「国際婦人平和主義」『外交時報』1930年4月1日号。

26) 前掲『新台湾行進曲』。

27) 「女浪人講演傍聴記」『台湾新民報』1930年4月29日付第310号（29日は26日の誤植と思われる）。

28) 『灌園先生日記（三）』中央研究院台湾史研究所籌備所、中央研究院近代史研究所、2001年。

〔付記〕

2004年、2005年の台湾における資料調査では、台北市文献委員会編纂卞鳳奎氏・国立成功大学歴史系（所）助理教授高淑媛氏・明台高級中学兼任講師張德卿氏・明台高級中学董事長林芳嫻氏・明台高級中学校長林垂益氏・国史館文献館研究員陳文添氏・趙婦産科院長趙宗冠氏・台安医院長蘇天賞氏のお世話になった。記して謝意を表す。なお、本稿は科学研究費基盤研究（C）「大正・昭和初期日本女性史と台湾—北村兼子と『婦人毎日新聞』『台湾民報』」の成果である。